

古代メソアメリカの球戯について

佐藤孝裕

はじめに

現在、様々な球技が世界中の人々に愛好されている。サッカー、ラグビー、アメリカン・フットボール、野球、テニス、バスケットボールと、人気のある球技は枚挙に暇がない。その中でも、世界で最も人気のある球技の一つはサッカーであろう。ワールドカップの歴史も長く、日本でもJリーグが若者を中心に人気を集めている。中南米の多くの国では、ほとんど国技のようなものとして国民の熱狂的な支持を受けている。メキシコを中心とするメソアメリカの国々も例外ではない。日本で、野球のシーズンには前日の試合の話に花が咲くように、サッカーの試合の結果に多くの人が一喜一憂する。

もちろん、サッカーは英国が発祥の地であり、メソアメリカに導入されたのはそう古いことではない。しかし、似たような球技は2000年以上前から行われていたのである。本稿では、紀元前に始まり、現代まで行われ続けているメソアメリカの球戯¹⁾について述べたい。

1. メソアメリカとは

メソアメリカで行われた球戯について述べる前に、先ず「メソアメリカ」という地域名称について説明したい。メソアメリカとは、1943年にキルヒホフが提唱した文化領域の名前で、政

治経済で使われる中央アメリカとか、地理学で使われる中部アメリカとは異なる。メソポタミアの「メソ」と同様、メソは「中間の」という意味のギリシア語起源の語である。恐らくこの地域が南北アメリカ大陸の間にあることから、このように名付けられたのであろう。メソアメリカは、インカ帝国が栄えた中央アンデスと並んで、中南米でヨーロッパ人が到来する以前に高度な文明を発達させた地域の一つである。現在の国名で言えば、北部乾燥地帯を除いたメキシコ全土、グアテマラ、ベリーズ、エル・サルバドル、ホンジュラスとニカラグアの西半分、及びコスタ・リカの北西部が含まれる。

このメソアメリカでは、紀元前1200年頃に起こったオルメカ文明を始め、テオティワカン、エル・タヒン、モンテ・アルバン、マヤ、トルテカ、アステカなど、数多くの文明が栄えた。これらの文明は、時代的にも地域的にも異なるが、様々な文化的共通点を持っていた。具体的には、次のようなものが挙げられる。

球戯場、カカオ（貴重品で貨幣の役割を果たした）、トウモロコシ主体の農耕、象形文字、四角錐のてっぺんを切り取ったような形の階段式の神殿＝ピラミッド、暦体系（365日の太陽暦と260日の儀式暦）、高度に発達した宗教体系（多神教）、市場、神殿を中心とし各種の建造物の複合体からなる都市、屏風のように折り畳める樹皮あるいは鹿皮の文書、数字と位取りによる数の表記、神官あるいは神

¹⁾ball gameの訳語は、通常は「球技」であるが、古代メソアメリカで行われていたball gameに関しては慣用的に「球戯」が用いられることが多いので、ここではそれに従う。

官=王を頂点とする階層的な社会構造，人身供犠

2. メソアメリカの球戯

メソアメリカで行われていた球戯は、重いゴム製のボールを巧みにあやつる必要のあった危険なスポーツで、敗れた側はしばしば人身供犠の対象になった。その起源はかなり古く、先古典期中期（前1000年—前300年頃）に属するオルメカ文明のサン・ロレンソや、メキシコ中央高原のクイクイルコやトラティルコなどで、プロテクターをつけた球戯者と見られる土偶が見つかっていることから、その頃には既に行われていたと考えられる。スペイン人による征服時には、アメリカ合衆国の南西部から南アメリカの北部に至るまで、広い範囲でゴム製のボールを使った競技が行われていた。この球戯はよほどヨーロッパ人の好奇心をそそったようで、コルテスは選手の一団を1528年にスペインに連れ帰り、王宮で競技をさせている。しかも、メキシコ北部のシナロア州では、いまだにこの種の球戯が行われている。

現在でも、サッカーやラグビーなどといった球技は、それ自体格闘技のように危険な側面を持つと同時に、サッカーのいわゆるサポーターに見られるように、試合の外にも暴力が介在する余地がある。古代ローマの市民がコロッセウムで行われた残虐なゲームに酔いしれたように、また現在でも闘牛に見られるように、人間の中には野蛮な行為に対するある種の嗜好が潜んでいるように思われる。恐らくはそのせいで、西洋社会は古代メソアメリカの球戯に引き付けられてきたのであろう。

球戯場はメソアメリカ一帯で発見されており、この球戯がいかに広い範囲で行われていたかを窺わせる。球戯場の建築の基本的な形態と

しては、まず二つの平行する建築物から成っていることが挙げられる。建築物のコート側の壁は、地面に垂直なものもあれば、傾斜しているものもある。また、球戯が行われるコートは、土のままのものもあれば、石が敷き詰められているものもある。そして、こういう球戯場は、先古典期のオルメカ文明の時代から征服時まで造られ、使用されていた。たとえば、アステカの首都テノチティランでは、14世紀に大神殿と同じ区域のいくつかの重要な神殿の脇に球戯場が作られた。そのすぐ傍にツォンパントリ^{#2}があるというのは、偶然であるというよりは、むしろ球戯の性格を暗示しているように思われる。球戯者は戦争捕虜であることが多く、最後の一人が勝者として残るまで球戯は続けられた。敗者は人身供犠の対象になり、胸を切り開いて取り出した心臓が神々に捧げられた。古典期ベラクルス文化の代表的遺跡エル・タヒンでは、少なくとも11もの球戯場が築かれている。まるでオリンピックかワールドカップが行われたかのような数の多さだが、そのような平和的なものでなく、球戯場の壁面に刻まれた彫刻を見ると、血生臭い人身供犠が伴っていたことが窺える。エル・タヒンで最も大きい球戯場は長さが65メートルもある。向かい合う二つの壁には華麗な浅浮き彫りが刻まれており、いくつかの場面にはその球戯場自体の中で球戯者が参加している儀式が描かれている。ある浮き彫りの中では、死の神が主役になっており、心臓の上にフリントのナイフを振り上げている勝者達は、敗れた側の主将を生贄にしている。

これらと異なる球戯の形態としては、テオティワカンで行われたものが例として挙げられ

^{#2}人身供犠に捧げられた捕虜の頭蓋骨を並べた基壇。

る。ここでは決まったコートを使わず、つまり球戯場なしで、その代わりに広場にゴールとなる標識を置いただけで競技したようである。標識は、その球戯が行われていた文化や地域によって異なる。征服時の標識は地面に直角に立つ壁にはめ込まれた小さな石の輪だったので、得点するためには上から下にボールを入れなければならなかった。こう言うと現代のバスケットボールのようだが、輪の角度やボールの重さやボールを扱う上でのルールの違いで、やり方はずっと難しかった。輪自体、ボールが入るのを助けるといっても、入りにくいような取り付けられ方をしていたし、大きさもボールよりわずかに大きいに過ぎなかった。征服時のボールの大きさは、大体直径20cm位だった。しかし、現在のボールと違って中空ではないので、重くて固かった。

アステカ時代に行われていた球戯は、社会の中で様々な役割を果たしていた。技を楽しむ単なる娯楽として行われる場合もあれば、十分なスペースがありさえすれば、若者二人が自ら楽しみもした。賭けの対象になることもあり、その場合は球戯が更に白熱化した。しかも、その賭けの最大の代償は死であった。球戯のやり方自体は単純である。1人から4人から成るチームが、手を使わず、お尻、肘、膝だけを使ってボールをコントロールし、ゴールポストに当たる標識に触れさせるか、あるいは輪に通せば勝ちであった。アステカ時代にこの球戯がいかに人気があったかは、ゴムがたくさんとれる低地から、毎年16000ものボールが首都のテノチティランに送られていたと推測されていることからわかる。

3. マヤ地域における球戯

マヤ地域の古典期に属する多くの遺跡で球戯

場が見つかっているので、古典期のマヤ社会でも球戯が行われていたこと自体は間違いない。今のところ、マヤ地域だけでも200以上の球戯場が見つかっている。チチェン・イツァだけでも7つの球戯場がある。しかしながら、球戯がどのように行われていたかは明らかではない。16世紀のアステカ社会で行われていた球戯に関しては、征服者であるヨーロッパ人が直接目撃しているため競技の内容はわかっているが、マヤ地域の球戯場とそれ以外の地域の球戯場とは形態が異なっているため、あくまでも参考程度にしかならない。

征服時のマヤ地域でどのような球戯が行われていたかは、高地マヤのキチュー人が残した『ポポル・ブフ』の記述から推測できる。そして、ここでもアステカと同様に、死と人身供犠が重要な役割を占めている。具体的には、次のような話になっている。

フンフンアフプーとウクブアフプーの兄弟は、地上で最も優れた球戯者だった。彼らは飽きることなく絶えず練習をしていたので、ボールが跳ねる音にシバルバ（マヤの地下世界）に住む神たちが怒った。彼らは兄弟の元にふくろうをメッセンジャーとして遣わし、地下の球戯場に来るように命じる。そこで両者の試合が行われ、兄弟は神々の罠にかかって敗れ、生贄に捧げられる。神々はウクブアフプーの体を球戯場に埋め、それから勝利を示すためにフンフンアフプーの頭を瓢箪の木につるす。ある日、地下の神の1人の娘が瓢箪の木の脇を通りかかった時、つるされた頭に話しかける。すると、頭は彼女の手で唾をはきかけ、そのために彼女は妊娠する。婚姻前の娘が妊娠したことで父親は激怒して彼女を殺すように命じたため、彼女は中世界（ミドルワールド）に逃げ、フンフンアフプーとウクブアフプーの家に隠れ住む。そこ

で双子を産み、彼らをフンアフプーとシュバランケーと名付ける。ギリシア神話のヘラクレスのように、この双子は半神半人だった。数年後、彼らは自分たちの父親と叔父が残した球戯用具を見つけ、球戯を楽しみ始める。そうすると、以前のようにボールの跳ねる音が地下の神の不興を買い、彼らは双子を地下世界の球戯場に呼び出す。ここまでは以前と同じなのだが、双子は自分たちの父親や叔父とは違って、地下の神々の罠を見抜き、最終的に彼らを策略を使って打ち破る。その後、天に昇り、彼ら双子の父と叔父が明けの明星と宵の明星になったように、彼らは太陽と月になる。

この『ポボル・ブフ』の記述から、球戯に関する特徴がいくつかつかめる。すなわち、球戯するのは男に限られ、人間の場合もあれば、半神半人や神の場合もある；球戯は決まった専用の球戯場で行われる；ボールは人間の頭ぐらいの大きさである；バスケットボールのように球戯者が輪にボールを通したら、得点が記録される；各チームは2人の選手から成っている；球戯者が身につける用具は、代々伝わり使われ続ける、等である。

長い間、球戯の残酷さが牧歌的なマヤ社会のイメージに合わなかったため、球戯はメソアメリカの歴史の中で終わりの頃になって初めて行われるようになったと考えられ、特にトルテカ人やアステカ人のような後古典期の人々に帰せられていた。『ポボル・ブフ』の中で球戯が重要な位置を占めているのも、それが高地マヤ固有のものだったからでなく、中央メキシコの影響によるものだと見られていた。チチェン・イツァにも先程述べたように球戯場が存在するが、これも50年前までは、トルテカ人がユカタン半島に持ち込んだものとして、マヤの文化的特徴の中からは除外されていた。

ところが、今世紀の初め頃、古典期マヤ社会で球戯が重要だったことを示すような建築物や図像などが、グアテマラのペテン県やメキシコのウスマシント川流域の遺跡で発見された。1920年代には、古典期マヤの遺跡を地図に位置付けるプロジェクトが行われ、古典期マヤの球戯場のレイアウトの特徴が初めて明らかになると共に、トルテカ時代以前に球戯が行われたことが実証された。実際、球戯場は古典期マヤのほとんどの遺跡で見つかっており、むしろそれがない遺跡の方が例外的である。球戯が行われている場面を表わす図も、多くの土器や彫刻に描かれている。

それらの図によると、マヤ社会では球戯は戦争捕虜を人身供犠に供す儀式だったようである。しかしながら、アステカ時代の球戯と同様の性格も持っていたようでもある。つまり、単にスポーツとして行われた可能性もある。主役は王であり、彼はこのスポーツ競技の英雄であると同時に、戦争の際の指導者でもあった。球戯がマヤ人の持っていた宇宙観を表わしていたとする説もある。それによると、ボールは天体の軌跡を表わし、王はその軌跡を設定する行為の主体だったことになる。

マヤ地域の都市では、最も規模が大きかつ豪華な球戯場は、アステカのテノチティランのそれと同様に、宗教的地域の中心にある。しかしながら、他の地域のものとは異なり、マヤの球戯場は両側が開いていて、球戯場に面して平行に築かれた建築物の内側は斜面になっており、その上でボールが跳ねたり転がったりできるようになっていた。球戯を行うグラウンドは、言わば両側の傾斜した谷底のような形をしている。少数の例外を除いては、ゴールの役割を果たす輪はない。その代わりに、両斜面にはそれぞれ三個ずつの石でできた標識が置かれてい

た。また、グラウンドにも三つの石彫が立てられていた。⁸³

先程も述べたように、球戯場が宗教的地域の中心にあるという事実は、マヤのエリートにとって球戯がいかに重要であったかを物語っている。たとえば、ペテン県にあるマヤの最大規模の古典期の都市であるティカルでは、小さな球戯場が中央アクロポリス、主宮殿、神殿Ⅰの間に位置している。そして、ほとんどのマヤの球戯場は、多くの観衆がそこで行われる球戯を見られるような場所に位置している。

古典期のマヤ人は、新大陸で使われた中で最も大きいボールを使っていた可能性がある。描かれている図から判断して、大体直径が30cmから45cm位の大きさだったと考えられる。色は黒で、こういうゴム製の固いボールは、重さにして3～4kgほどあったのではないかと考えられる。チチェン・イツァやエル・タヒンで描かれた図の中には、人間の頭蓋骨をボールの代わりに使っているものもあり、その場合はもちろんもっと軽かったであろう。

このような固いボールを使って球戯するために、球戯者はさまざまなプロテクターを身につけていたことが、残っている図や土偶及び石製品などの遺物からわかる。特にプロテクターがどのように使われていたかについては、ハイナ島で見つかった土偶が参考になる。ただ、それらの石製品は、メキシコ湾岸のベラクルス地方やグアテマラのコツマルワパ地域で多く見つかっていて、マヤ地域ではパレンケとコパンで見

つかっているだけである。しかも、それらは古典期マヤ文明が崩壊した後に、マヤ人以外の人々によってもたらされたと考えられている。そもそも球戯の発祥の地は、メキシコ湾岸周辺であって、ここからカカオなどを交易品として扱った商人たちによって広まって行ったと考えられている。これらの石製品の中でも特徴的なのは、U字型をした「ユーゴ（くびき）」で、球戯者が身につけた皮や木でできた重いベルト状の防具を、石で複製したものである。このベルトの前部には「パルマ」と呼ばれるやしの葉の形をした細長い彫刻がつけられた。また、人の顔、グロテスクな猛獣、金剛インコ、七面鳥などの頭をかたどった「アチャ」と呼ばれる薄手の石彫も、特異な石製品のひとつである。これは球戯場のゾーンを示す目印と一般に考えられているが、球戯の後の儀式の時には、「ユーゴ」の上に乗せて腰に帯びて用いられた。その様子を表わしているのが、先に言及したハイナ島の土偶である。

碑文や図像から、死や人身供犠は、しばしば球戯の結果としてもたらされたことがわかる。しかも、後古典期になると、チチェン・イツァの球戯場に描かれている六つの浮き彫りからわかるように、敗れた側は首を切り落とされている。テノチティランと同様に、ここにもツォンパントリが存在するので、この球戯は敗者が最終的にツォンパントリの上にその首を並べられるまで果てしなく続いた可能性が強い。ここには、中に人間の頭蓋骨が描かれているボールも刻まれている。また、ティカルの祭壇8には、ボールの中に縛られた捕虜と見られる人間が描かれている。この場合も、恐らくこの捕虜が球戯で死んだことを暗示しているのであろう。

先程、『ポポル・ブフ』の話について述べた。この中で、双子の英雄は地下世界の神によって

⁸³これに対し、メキシコ中央高原文化の影響を受けたと見られる後古典期のチチェン・イツァのように、コート側が垂直な壁になっている建築物二つが並んでいるものもある。なお、この球戯場はメソアメリカで最大規模のものであり、長さ83m、高さ8.2m、二つ並んだ建築物の間隔が60.7mもある。

球戯場の中で生贄に供されたのではなかった。そうではなく、毎晩ある館に連れて行かれ、そこで死から逃れるために様々な試練に耐えなければならなかった。ここで言う館とは、古典期の建築物のピラミッドのてっぺんにある神殿を意味していたのではないかと考えられる。マヤの球戯がどのように行われていたかについての詳細はわからないが、もしこの『ポポル・ブフ』の中の物語が古典期の状況を忠実に反映しているとすれば、これらの出来事は次のような手順で起こったのではないかと考えられる。まず、捕虜を球戯場で強制的に球戯を戦わせ、敗れた側をピラミッドの上の神殿まで連れて行き、ボールのように丸く縛る。そして最後に、階段から突き落とし、死へと至らせるのである。

このように階段を使って球戯の結末として行われる、言わば死の儀式は、しばしば凶像の主題になっている。球戯に関連する文字は、階段に刻まれていることが多い。その中には、捕虜の名前やその死の記録なども含まれている。たとえば、735年にセイバルの王『足ジャガー』が、ドス・ピラスの王に捕まえられる。その12年後の金星が内合する日（古典期のマヤ人が戦争や人身供犠を行うのに最も適していると考えた日）に、『足ジャガー』王は球戯を行っている。彼の名前が碑文に言及された最後の日があるので、その日の球戯の結果、彼は命を落としたものと考えられる。このように、よその国の王は、戦いの際に王が手に入れる中で最も望ましい戦利品だった。そして、捕えられた王は、恐らくは球戯によって、人目を引くような形で、つまりは衆人環視の中で殺された。戦争と球戯の関係がはっきりしている場合もある。たとえば、631年にカラコルはナランホと戦い、これを打ち破った。それを記念して、カラコルでは碑文の刻まれた階段が築かれる。他方、敗れた

側のナランホでは、階段に戦争を表わす文字に引き続いて球戯を表わす文字が刻まれている。この両者の密接な関係を物語っている。またコパンでは、神殿11の南側、俗に『閱兵台』と呼ばれている場所の、球戯場を表わすと見られる三つの正方形の標識の後ろの階段で、捕虜が人身供犠に捧げられた。

4. おわりに

以上述べてきたように、メソアメリカでは球戯が先古典期から行われ、古典期の7世紀の終わり頃までには人身供犠を伴う儀式になった。元々の発祥の地であるメキシコ湾岸から恐らくは商人による交易ルートを通じて広まり、古典期中頃や終わり頃にはメソアメリカのたいていの都市で行われるようになる。そして、スペイン人が到来する頃まで行われ、現在でもシナロア州のような一部の地方で行われている。ただ、球戯場の形態が地方や時代によって異なるため、球戯の行い方は必ずしも一様ではなかったと考えられる。

球戯は本来は儀式の一環として行われ、しばしば人身供犠を伴ったのだが、アステカ時代には娯楽的要素も持つようになった。娯楽としての球戯はさておき、儀式としての球戯は古代メソアメリカの人々が持っていた世界観・宇宙論を体現するものでもあった。その意味で、球戯についての研究は、古代メソアメリカの思想の解明の一助になるものと言える。

参考文献

- Coe, Michael D.
1984 Mexico. London: Thames and Hudson, Ltd.
1987 The Maya. London: Thames and Hudson, Ltd.

Scarborough, Vernon L. and David R.
Wilcox (Eds.)

1991 The Mesoamerican Ballgame. Tuc-
son : The University of Arizona
Press.

Schele, Linda and Mary Ellen Miller

1986 The Blood of Kings : Dynasty and

Ritual in Maya Art. New York :
George Braziller, Inc.

Weaver, Muriel Porter

1981 The Aztecs, Maya, and Their Pred-
ecessors : Archaeology of
Mesoamerica. New York : Aca-
demic Press.